

『元』 王道RPGゲームの中に転生したら、無限魔力で世界を救う羽目
になって…

リル★

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリ主人公北きた優魅ゆうみが、ゲームの世界に転生して、殺戮者に挑むSS。

舞台は元々RPGゲームで勇者が魔王を倒す王道なものだったが、今は仮想現実バーチャルワールドとなっている。

転生した優魅の能力は3つ。

- ・無限魔力
- ・復活魔法
- ・物真似系能力

後の説明は面倒だから、SSを実際に読んでいってね。

目次

プロローグ	1
第1話 転生で飛ばされた場所がいきなりコロシウムなんですが、それは（汗）：	6
第2話 勝手にライバル認定されても困るんですけど！！	12
第3話 こんな勇者は”勇者”じゃない！！	19
第4話 ついに魔王の城に辿り着く！！	24
第5話 決戦の準備をしている途中に：2人の仲間！？	29
最終話 『元』王道RPGゲームの中に転生した私は無限魔力で世界を救う羽目になって：!?!』	32
エピローグ	40

プロローグ

昔昔^{むかしむかし}ある所に1人の勇者がいました。

その勇者の住む世界では魔王によって征服されていました。

ある日、勇者の住む世界の唯一無二の姫が魔王によって攫^{さら}われました。

これをキツカケとして勇者は魔王を倒すことを決心し、冒険へと出かけました。

冒険の途中には魔王の手下や野生の獣らがたくさんいました。勇者はその手下や獣を倒す必要でした。

勇者はコマンドを使って攻撃し、手下や獣を倒していきました。また、それによって経験値を手に入れ、段々と強くなっていきました。

強くなった勇者はついに魔王の城へと着きました。すぐに、勇者は魔王と対峙しました。

勇者はその強さで魔王を倒し、姫を取り戻しました。

こうして勇者は姫を取り戻しただけでなく、平和をも取り戻したために英雄なる勇者として語られ続けられるのであった。

くおしまい

というゲームがある。

これは勇者が魔王を倒す王道RPGだ。

クリエーター
作成者はこのゲームのキャラクター1人1人に知能を与え、ストーリーの終わった今でもキャラクターたちは生活をしている。

邊^{あた} 真宵^{まよい}は世界一の天才と呼ばれていた。

上記のゲームを作ったのも彼だった。

彼はより現実^{リアル}にするために、本物の人間をその中^{ゲーム}に入れることを考え、研究を始めた。

「転生の技術が完成したあー！」

彼はついにゲーム世界に本物の人間を転生させる技術を完成させ

た。

そしてすぐさま、1人の女の子を転生させた。

そのゲームにはHP、体力A、攻撃力B、防御力MP、魔法パワーPP、魔法ゲージS素早さで能力が決められている。

最初に転生させた女の子は全ての能力をMAXにして転生させた。

「僕には強い能力はいらないので、簡単に仲間が増えるようにして下さい。」

真宵はRPG世界をやめてバーチャルワールド仮想現実世界へと変えた。

戦う時は、相打ちや相殺などが加わった。

真宵は変えることと同時に新たな人を転生させようとした。新たな機能をゲームキャラクターらに深く理解してもらったためだ。

そのために転生してもらう人は男の子だった。

男の子は能力よりも仲間を望んだ。

真宵は転生した男の子に、触れるだけで仲間に出る能力と簡単に村や住処を建てれる能力を与えた。

そして、ゲーム世界はより現実味が帯びてきた。ただ、ゲームのバトル要素があるために、現実と同じになることはない。

そして、時間は過ぎ去っていった。

2022年。

真宵は困っていた。

自身の作ったゲームの世界で沢山の死者が出てきたからだ。

真宵はキャラクター1人1人に個性と頭脳を与えていた。そのために、増産ということはしたくない。

作るのもキャラクター設定をして作っていくしかない。

また、死者を復活させるにはその死者の特徴を把握する必要がある、復活させるのには時間がかかる。

新たに転生者を送り出して、この状況を打破したい。と考えるようになった。

北きた 優魅ゆうみは地元きよの学校がっこうに自転車じてんしゃで通う高校こうこう3年生さんねいせい。

季節きせつは秋あきとなっていた。

優魅ゆうみの進路しんろは、大学だいがくに行くことが決まっていた。公募制推薦こうきよせいすいせんで大学が決まっていた。

今は学校生活がっこうせいふくを楽したのんでいる。

楽しい日々を過ごしていたが、そんな日は続かなかった…

優魅ゆうみは自転車じてんしゃに乗って登校とうがっこうしていた。

横断歩道よこたんぽどうを渡ろうとした時、猛烈なスピードで車が近づいてくる。避けきれない。

優魅ゆうみは車くるまに轢ひかれた。

目を覚ますとそこは病院びやういんだった。

死んでいいはないようだった。

「いてててて…」

身体からだが痛いたくて、動うごかない。

「大丈夫だいじゆう？」と近くにいた親おやが声をかけた。

医者いしやが来た。

「失礼しつれいします。優魅ゆうみさんとそのご両親りやうしんさん。病名びやうめいは全身骨折ぜんしんこつせつと言えますね。普通ふつうだったら治なおるはずなのですが、破損部分ははきんぶぶんが多く、一生車椅子いっしょうくるいざし子こでギリギリ手てが使つかえれば嬉しい程度ていどです。」

「えっ？」と優魅ゆうみは今いまにも泣なきそうな声こゑで驚おどいた。

「リハビリ次第りはびりさいだいで手ての方は使つかえるかもしれませんが、足あしの方は絶望ぜつぼう的てきですね。」

「そうなんです…」

優魅ゆうみは心こゝろの中で『死しにたい』と思おもい始めた。

医者いしやに頼たのんで、穏おだやかに死しのうと考かんがえ始めた。

チュンチュンと雀すずめが鳴なき、朝焼けあさやけの光ひかりが病棟びやうていに射しし込む。

「起きてください。優魅ゆうみさま。」

優魅はその言葉で目を覚ます。

「だ…れ？」と目を擦りながら言った。

「非常に申しにくいことですが、優魅さまは死にたいと思われていますか？」

優魅は正直に死にたいと思っていた。ここは素直に答えることにした。どうせ、死ぬるなら何でもいい。

「ええ。死にたいと思ってるけど、どうして？」

「もう1度、自由な身体で生きてみたいとは思いませんか？」

「えっ？思うけど…そんなこと出来るの？」

「出来ますよ。転生させることでね。」

話かけてきたのは真宵という男性だった。

真宵はゲームの世界を作っていて、そのゲームマスターである。

優魅はその世界に行かないかと誘われたのだ。もちろん、今住んでいる世界には戻れない。

「最近、死者が多くてね。殺戮者が原因なのは分かるけど、対処も出来なくて…」

「転生してやって欲しいことはその原因を倒すこと？」

「それもあるけど、加えて死者を蘇らせることかな。」

「どうやって？」

「優魅さまには、あつちの世界に今はない”復活の呪文”を渡そう。」

「復活の呪文を使えるんだ？」とワクワクしながら言う。

「そう優魅さまは復活の呪文を使える”女神”です。」

女神になれる。とても嬉しいことだ。

希望がない今、新たな希望がある世界へと踏み出すことが出来ると聞いて行かない理由がない。

「それに加えて、優魅さまには無限の魔力と魔力パワー。そして、全ての技を与えたいと思います。」

「その話乗った!!」

「ただし！全ての技を持つことは無理なので、最後に触れたキャラの技を1時間使い放題の能力にします。」

良くあるモノマネの能力だ。

確か”僕のヒーローアカデミア”の物間寧人と似てる能力だなと思っただ。

「じゃあ、転生することで決定でいいかな？」

「うん！」と元気よく頷いた。

「優魅さまはこの世から天に飛び立ったということでは話をつけておく。」

「分かった」

優魅はゲームの世界へと転生した。

このようにして、優魅の冒険が始まった。

第1話 転生で飛ばされた場所がいきなりコロシムなんです、それは(汗) …

優魅は転生した。

転生した先はとあるゲームの世界だ。

彼女に与えられたステータスは…

【ランク】 18

【HP】 31

【A】 21

【B】 19

【MP】 コピーした相手と同じになる

【PP】 無限

【S】 29

であった。

彼女は段々とゲームの世界へと吸い込まれ、現実から遠のいていった。

優魅は地面に倒れていた。

目を覚ますとそこは…

コロシムの目の前だった。

「手始めにコロシムに挑戦して、能力を試してみよう！」

優魅はコロシムに入り、参加出来るか聞いた。参加可能ということを知った後、参加することにした。

コロシムでは、1VS1の戦闘を行いどちらかが戦闘不能になったら終了。トーナメント戦で行われ、優勝を決める。

このコロシムでは死ぬことはない。

1回戦目

VS村人Q

「選手の入場だあー！」と司会者が叫び、2人はコロシアムの決闘場の中へと入っていった。

村人Qはどこにでもいそうな田舎出身の少年っぽい容姿だった。優魅とQはコロシアムの中心の決闘場へと立っている。

2人は握手を交わし、お互いに距離を置いて戦闘は始まった。

『呪文：ファイア』

Qの魔法が炸裂する。火の玉が優魅に飛んでいく。

優魅は自身の能力の練習のために相手が撃ってきた魔法と同じ技を繰り返していくことにした。

『呪文：ファイア』

Qと同じく魔法が炸裂する。火の玉同士がぶつかり合った。そして、相殺した。

「やっぱり、基礎炎技は使えるようだね。けど、僕はもつと基礎魔法を使えるんだぜ。」

「楽しみね」

『呪文：アクア』

Qは火の玉の水になったものを繰り返すが、優魅も同じ技を繰り返すので相打ちになった。

「だったら」とQ。

『呪文：サンダー』

電気がビリビリと真っ直ぐ進んでいく。相打ちにならず、お互いに向こう側の敵へと当たった。

お互いに怯む。

少し間が開いた。

優魅は今持っている技で一番強そうな技を模索した。その技を撃つつもりである。

見つけた技は呪文：シャインだった。

『呪文：シャイン』

『呪文：ダーク』

Qが撃ってきたのは呪文：ダークだった。

「僕の持つ技の中で一番強い技だよー」

その言葉を聞いた優魅はしまったと思ったが、もう後には戻れない。

周りを明るくする光の玉と周りを暗くする闇の玉がぶつかった。

お互いに衝突しあい、相殺した。

『呪文：リーフ』

優魅はすぐさま呪文を出した。

葉っぱが大量に出てきてQ目掛けて空を切る。

「う、うわあ〜」

Qは呪文・ダークを撃つたことで油断していた。そのため、呪文：リーフに対しての対処は出来なかった。

こうしてQは倒れ、優魅は勝利した。

「勝者はア！謎の女の子、優魅だああア！」

「疲れたあ…」

今は他人の試合なので、優魅にとっては休憩時間だ。

その間に優魅は休むことにした。

2回戦目

V S 召喚士：I

優魅とIは握手をしてから、少しだけ間を空けた。

「さあ、試合のコングが今鳴ったア！」

Iは手を前に出して身を構えた。

「召喚！ぽによん」

ドラゴンクエスト^ドのスライムのような、スライムじゃないような…。青色のちよつとだけ細長いぐにやぐにやなモンスターが突如現れた。

「何？その可愛いモンスター？」

「知らないのか？こいつはぽによん。まあ、世にいう最初に出てくる雑魚キャラと言われてるやつだ。」

「へえ、スライムみたいだね」

「俺はそのスライムというやつが分からないが、まあぽによんは意外

と強いんだぜ。俺はそんなぽによんの召喚を得意とする召喚士だ！」
「なるほどね」

「もう一体召喚！現れろ、トゲぽによん」
先ほどのぽによんに棘がついているモンスターが現れた。

「こつちも紹介！」

優魅は技を確認した。

使える技は”ぽによん召喚”ただ一つだった。

「召喚！ぽによん!!」

優魅は技を唱えようと手を前に伸ばした。

伸ばした手から何かを感じる。魂のような何かだ。

様々な魂がある。奥にあるものほどその魂の強さは強くなっていくが、奥に手を伸ばせば伸ばすほど魔力と時間を使う。

「強いモンスターを召喚する気か？召喚させる前に殺る。行けつ、とげぽによん！」

とげぽによんは優魅に体当たりを仕掛けようとした。

(感じる…敵が今にも襲いかかってくる)

優魅は自身の身に危険を感じ、急速にモンスターを繰り出した。

「メラア〜！」

とげぽによんは火のダメージを受けて倒れてしまった。

優魅が召喚したのはメラぽによんだった。

このぽによんは燃えてるぽによんである。

「やられたか。だったら、ぽによん、体当たり!!」

「燃えてるからメラぽ^モによん^エと命名つ！こつちも体当たり!!」

ぽによんとメラぽによんがぶつかつた。もちろん火を身にまとっているメラぽによんが勝つた。

「残るは後1人」

「そうはしない召喚つ、ビリぽに…」とIがいいかけた時、優魅はIの目の前に身構えていた。

「パンチ!!」

優魅はIを殴る。

Iはそれに怒りを感じ、やり返した。

「痛いなあ、もう！」と優魅もやり返した。

小学生の喧嘩みたいな低レベルの争いは、2人の争いの隙にIの後ろをとったメラぽによんの攻撃によって終結した。

「勝者！優魅！」

観客たちの優魅への評価はこの試合によって低くなっていた。

優魅が休憩を取っていると、何かの視線を感じた。モンスターの気配だ。

優魅はそつと近づく。

そつと…

「メラつめ、メラア」

先の試合で優魅が召喚したメラぽによんだ。

優魅は魔法で元の場所に戻そうとしたが、Iから触れて1時間経っていたために魔法は使えなかった。

次にIを探すことにしたが、見つけることは出来なかった。

「ぽによーお」

メラぽによんが仲間になりたい目でこちらを見つめている▼

「これから考えると手放したいけど…何か手放せない、けど…」

メラぽによんが仲間になりたい目でこちらを見つめている▼

「ぽによお…」

「うっ」

「ぽによう？」

「けど、やつぱり」

メラぽによんが仲間になりたい目でこちらを見つめている▼

「いや、だめだ、だめだ。これから殺戮者、多分魔王を退治しないといけないんだ。連れてなんていけない!!」

「ぽによー」

「うむ、無理だな」

メラぽによんが仲間▼

メラぽによんが仲間に加った!!▼

優魅はついにメラぽによんを仲間にすることにした。

「モエちゃんの眼差しには勝てなかった…」

第2話 勝手にライバル認定されても困るんですけど!!

『スレイプニル』

無数の斬撃が敵を襲う。

『グングニール』

大きな斬撃が敵を切る。

「勝者：ハイ・ゼルンだあ！」

コロシ आम 全体が歓喜に包まれた。

白髪の長身の男は何も言わずにフィールドを後にした。

第3回戦目（準決勝）

V S ゼルン

優魅は白髪の真面目そうで、心の奥に活力ある力を持っている男と握手を交わし、その男と距離を取った。その男とはゼルンだ。

「私はゼルン。斬撃魔法の使い手だ。普通はモンスターを召喚するのではなく、持ち込むのは禁止だよ。けど、私はそれを認めよう。お願いするよ司会者兼審判。」

「モエちゃんの同行ダメだったの？」

「まあな。まあ、いてもいなくても変わりはない。安心してくれこのコロシ आम 内では死ぬことはない。」

「それじゃあ、始めるよ！モエちゃん、攻撃!!」

メラぽモエちゃんによんはゼルンに向かって、体当たりをした。

『ミュルグレス』

ゼルンは無数の斬撃を空に向かって撃った。その斬撃は一旦宙に留まってから、地面へと落ちていく。まさに、斬撃の雨のように。

メラぽによんは倒れてしまった。

「よくも…モエちゃんを!!」

「だから言った。いてもいなくても変わらない…と。終わらそう。」

『ニユルミヨン』

斬撃が自由自在に動いていく。

ゼルンが手を動かすとその斬撃はその手の動かした方向へと向かっていく。

「こっちはこれよー。」

『トール』

優魅は空に向かって斬撃を撃った。その斬撃は、地面へと落ちていく。

凄まじい威力の斬撃が地面に向かっていった。ゼルンの操った斬撃は、優魅の斬撃に押し負けて消えてしまった。

この斬撃はまさに小さな隕石が落ちたようだった。

「なら、こいつでどうだ？」

ゼルンは左の方向へと踏み込んだ。そして、目には見えなくなってしまう。

「はやいー！」と優魅は思いつつ、次の行動を考えることにした。

”早いやつはいつも背中を取ろうとする。”

優魅は後ろ側に攻撃する準備をした。

スツ

優魅の予想通り優魅の後ろ側に回り込んでいた。

『スレイプニル』と優魅は先制を仕掛けた。

『グングンい…』とゼルンが言いかけた時、優魅の技が入った。

無数の斬撃がゼルンを襲う。ゼルンはたまらずに優魅との距離を離す。

「やるな。次の技で一気に終わらせてやる。」とゼルン。

ゼルンは魔力に限界を感じ始めていた。

ゼルンは真下に小さな斬撃を撃つことによって、空を飛び始めた。

そして、空中に留まったゼルンは手を優魅に向けた。

「やっとな時間が出来た。」と優魅。

優魅には現ストックしている最強の攻撃技を撃つための時間を確保することが出来たようだ。

優魅はゼルンの方向を向き、技を撃つ構えに入った。

『アレス・テンペスト』

風がたちまち斬撃のエフェクトへと変わり、斬撃の刃が優魅に狙いを定める。

ゼルンが手を下ろすと、全ての斬撃は優魅に向かって飛んでいった。

『フェンリル』

優魅は大きな斬撃を沢山繋がった怪物のようなものを作った。それは、フェンリルと呼ばれる、狼のようでケルベロスのようなものだった。

ゼルンの斬撃はフェンリルに吸収された。斬撃で作られているフェンリルはゼルンを襲う。

その攻撃が直撃。ゼルンは地面へと落下していった。

観客も含め辺りが静かになった。

「しよ…勝者は、なんと…優魅だあア！」

コロシアムが歓喜で包まれた。

メラぽによんが戻ってきた。

ゼルンも意識が戻った。戦いによって気絶していたようだ。

「この勝負負けたよ。君を私の好敵手ライバルと認めよう。次会うときはまた戦おう。」

「ありがとうございます。けど、会うことがないと思うけど。」

「いや、好敵手は会うに決まってる。まあ、またいつか戦いあおう。」

ゼルンはその場から去っていった。

優魅は休憩を取っていた。今は次に戦う相手が戦っている。が、優

魅はそれを見ようとはしなかった。

「さすが、勇者の仲間だったのよねえ」

そんな声が観客の1人から聞こえた。

「勇者の仲間？」と優魅は思わず聞いてみた。

「そうよ、今戦っているのが元勇者の仲間のアランよ。」

優魅の表情は晴れ渡った。上手く行けば、勇者の元へ行けるかも知れないと思い、嬉しさが募ったのだ。

そして、決戦が始まる。

「モエちゃん、そこで見えていてね」

優魅は戦場へと向かっていった。

第4回戦目（決勝）

VSアラン

アランは重装備を身にまとっているいた。

アランは元武器屋の少年で、勇者が武器屋に来た時に仲間になった。得意なのは武器を使った攻撃だ。

優魅とアランは握手を交わし、一旦距離を置く。

アランは魔力が全くない。そして、覚えてる技がない。物理的な攻撃しか出来ないようだった。

つまり、優魅の使える技は全くない。

「いくぞっ、強者っ！」

アランが襲いかかる。

優魅は何も出来なかった。

「まいりました！」

優魅がそう言うと、アランが一瞬止まった。

「はっ？今の聞き間違いだよな？」

「何が？私は”まいった”とは言ったよ」

「なぜ？」

「それは、あなたには勝てないからよ」

「そうかそうなのか？つまり、さっきの試合で全てを出し切ったんだな。」

（そうした解釈の方が良いかもね）「そうよ」

「今回の勝負はお預けだ。」

「勝者：アラン！」

優魅へのブーイングが会場を呑み込んだ。

「みんな聞いてくれ、優魅さんは魔力を使い切ったんだ。ゼルンとの勝負で。許してあげてくれ」

アランは会場に向かって言う。そうして、会場の不穏な空気は消えた。

「アランさん、ありがとう」

「大丈夫だよ」

「負けた身で何なんだけど…一つお願いいいかな？」

「なんだ？」

「勇者の仲間だったんだよね？勇者に合わせてくれない？」

「無理だな。僕も会いたいよ。」

「離れ離れになっているのね…」

「全ては死神のせいなんだ。勇者が死んだのは…。それに、新たな希望も死んだのは。」

「死んだの？」

「そうだよ」

アランは少し涙を流していた。

「じゃあ、勇者の墓場に連れて行ってくれない？」

「それならできるよ。」

「ほんとに？お願いしていい？」

「いいよ。明日の昼にここに集合ね。」

「分かった。」

アランは先に帰っていった。

優魅は明日の昼まで何をするかメラぽによんとともに考えていた。

優魅が会場から外へ出ると、そこにはゼルンがいた。

コロシアムでは経験値が入らなかつたけど、ここで倒せば経験値が入るかも知れない。と優魅は思う。

「ゼルン、やつほー」

「好敵手…。何か気さくすぎやしないか？」

優魅はゼルンに触れた。

「次あったら戦おうと言ったよね？」

「そうだな。言った覚えもある。」

「じゃあ…」

『トール』

優魅の出した重い斬撃はゼルンを押し潰す。

「いきなり何をするんだ？」とゼルン。

「だから、戦ってあげてるの！後、先に言うね。ごめんなさい。」

「ど…どういふことなんだっ？」

『スレイプニル』

無数の斬撃がゼルンを襲う。

『グングニール』

斬撃の刃がゼルンを倒した。

ゼルンは死んでしまった。

優魅は15477の経験値を手に入れた▼

優魅はレベル27になった▼

ついでに、メラぽによんにも経験値が入った▼

メラぽによんはレベル18になった▼

「後は復活させるだけ…と。けど、復活の中で一番体力を復活させな

いのは…」

『復活魔法：緊急蘇生』
エミリア

ゼルンは体力1で復活した。

「私はどうして…どうなっ…」と言いかけた時、

『スレイプニル』

と優魅は欠かさず攻撃した。

優魅は経験値を手に入れた。

優魅はその後も繰り返し、緊急蘇生と殺しを連続で行った。

優魅のレベルが42になった時に、終わりを告げる。コピーできる

1時間が過ぎてしまったのだ。

「よくもやってくれたな」とゼルン。

「こっちはまだモエちゃんがいるけど」

「うっ」とゼルン。

「今日はありがとうね。レベル上げに手伝ってくれて。」

「そんな覚えはないが。」

「まあ、あなたが次会ったらなんて言わなければね。」

「もういい。またいつか会おう。」

ゼルンは足早でその場から離れていった。

現在の優魅

レベル：42

A：132

B：125

MP：相手と同じになる

PP：無限

S：144

現在のメラぽによん

レベル：39

A：97

B：38

MP：101

PP：15

S：88

次は明日だ。ついに、勇者に会うことが出来る。と優魅は期待を膨らませていた。

第3話　こんな勇者は、勇者、じゃない!!

「ついてきて、7つのエリアの中をくぐり抜ける必要があるから注意してね。」

約束の時間になった―

コロシアムの中心で、優魅とアランは話していた。

今日は優魅が勇者に会いに行く日である。その勇者に会うために、7つのステージのエリアを抜けることになった。

【エリア：火】

優魅とアランはまずは火の中をくぐり抜けることになった。

周りは枯れ木と燃えてる炎、地面が見えるだけである。殺風景でも無いために、優魅たちは何事もなく抜けることが出来た。

【エリア：水】

次の場所は水の中だった。

「このゴーグルとボンベを付けてくれ。」とアランは優魅に手渡した。

水は無色透明で、綺麗だった。美しいモンスターや動物などがいて、優魅は楽しみながら進んでいた。

ただ、メラぽによん（モエちゃん）が瀕死になったから、モエちゃんを持ちながら進むことになって大変だった。

【エリア：草】

メラぽによんは死んではいないために復活出来ない。けど、死にかけなので運ぶ必要があった。アランが持ちながら先導をきった。

ゲームの中だからといって、濡れないわけではなかった。

優魅は濡れた服のまま草むらをかき分けて進んでいた。草の中には、虫や虫みたいなモンスターがうじゃうじゃいて、優魅にはしんどかった。優魅は虫が苦手であった。

無我夢中で進んでいった。早く抜きたいという気持ちが大きかったのだ。

【エリア：森】

いつの間にか草むらから森の中へとエリアが変わっていた。
メラぽによんが完全復活した。

虫や森のモンスターは炎が怖くて近づかなかった。そのために、優魅たちは簡単に抜けることが出来た。

【エリア・土】

土の中は洞窟みたいになっていた。

アランが先導をきって、進んでいく。暗い洞窟を優しく照らすライトは先に先にと進んでいき、優魅周辺の明るさが暗くなっていく。そんな暗さが優魅を不安にするが、明るい方へ方へと行きたびにいつの間にか土の中から外へ出ていた。

【エリア・雲】

土の次は何故か天地逆転してるが雲の上だった。

雲はトランポリンのように跳ねたために、優魅たちは楽しく跳ねながら進んでいった。

そして、いつの間にか次のエリアへと辿り着いていた。

【エリア・???】

肌色の道を進んでいく。

その道は丸田のように丸いが、重心が丸田の中心へと引っ張っていくために落ちることはなさそうだった。

少し柔らかい道だ。

その後、クッションのような踏み心地の場所を歩く。

そして、クッションのような場所の次はまた肌色の道だった。

「ここはどんなエリアなんですか？」と優魅は聞いた。

「ここは”あの子のスカートの中”だ！」

「はあ?」

「えっ?」

「全く意味が分からないんですけど…」

「いや、そんなことを言われても。そう言う場所なんだから…」

ふと思いついたことがあった。

これは真宵の作った妄想ゲームの中だったことを。

「まあいいよ、ここを抜ければ勇者でしょ?」

「まあ、勇者の墓場だけどね。」

【勇者の墓場がある村】

「ここだよ」

そこはとても立派な墓!! だった。墓というより古墳に近いかもしれない。

見た目はまるで豪邸のようだ。

「こんなにも大きいとは…」

優魅は驚きを隠せない。

「それは、みなから認められた勇者だからね。遺骨は真ん中にあるよ。」

「そうなんだ。」

「まあね。勇者さんは本当に…けど…」

アランは少し涙目になってきている。

「あいつさえ…ければ、勇者もそーすけも…」

アランは途中途中で涙ぐむ。

「大丈夫？」と優魅は聞いた。

「ああ、大丈夫だよ。ごめんね」とアランは返した。

「僕には倒さなければいけない敵がいるよ。僕はそいつを倒しに…行かなければ。」

「倒さなければいけない敵？」

「僕が尊敬や親しみを持つてる勇者やそーすけを殺した原因だよ。」

「倒しに？」

「そう。僕は先にお別れ言っておくよ。勇者の場所まではいけるよね？」

「いけるけど…」

「じゃあ」とアランは行ってしまった。

優魅は古墳のような墓の中を進み、遺骨の場所へと来た。

優魅は遺骨に手を向ける。

「復活させるね」

『復活魔法：完全蘇生』
エスケープビル

そこに現れたのは…

中年太りしたおっさんだった。

「何故ここに？」

重く遠くに響く声だ。

優魅は勇者を復活させたはずなのに、ただのおっさんが出てきて動揺した。

優魅は深呼吸をしてから、

「あんたは誰なん？」と言った。

「ああ、わたしのことかい？わたしは勇者だが。」

「えっ？」

「何に疑問なんだ？」

「想像していたのと違う!!」

「まあ、魔王とのいざこざを解消してから、何年か経って、その間に中年太りしてしまったからね。」

「そうなんだ…」

優魅は段々と動揺が収まってきた。

そして、目的のための交渉をすることにした。

「魔王の元へ行きたいんですけど。一緒に来てもらいませんか？」

「魔王の元へ？まあいいよ。君はわたしの恩人だしな。連れて行ってあげるよ。」

優魅の目的地である魔王の元へ。

多分アランは先にそこへ行ったんだろう。

「さあ、早くいこっ？」

「ちよつと待ってくれ！」

「どうしたの？」

「魔王の元へは”この笛”を使うんだ。」

「そうなの？」

「そうだよ。ちよつと待ってね。」

勇者は笛を鳴らした。

眩い光に包まれていく――

目の前には魔王の城が広がった。

次回：ついに魔王の城につく！

優魅、メラぽによん、勇者は無事に戻れるのか？

t o b e c o n t i n u e d

第4話 ついに魔王の城に辿り着く!!

暗闇の空に、真っ黒な城。

雷が降り注ぎ、カラスが周りを彷徨うろついている。

優魅、メラぽによん、勇者の目の前には大きな城が立ち塞ぐ。

「ここが魔王の城…」と優魅は呟いた。

ガチャーン、カシャー

入口の大きなドアが開く。

ゆっくりと開いていくドアの隙間から見えるのは豪華な空間が垣間見える。金と黒の2色による美しい空間が。

ドアが完全に開いた。

金色のオブジェクトや噴水。銅像。床は金と黒の2色を基調としている。

まさに豪邸だ!!

「な…なんと? ゆ、ゆ、勇者が何の御用で?」

モンスターが話しかけてきた。コウモリと老婆を掛け合わせた感じのモンスターだった。

「横にいる命の恩人が魔王に会いたいんだってさ」と勇者。

「ちよつと待っててくださいいな、魔王様の元へ行ってきました。」

幾分か待った。

先ほどのモンスターがやって来た。

「さあ、勇者一行、こちらでございます。」

モンスターと勇者を先頭に、優魅とメラぽによんは後ろをついて行った。

そして、魔王の待つ部屋についた。

魔王はとても大きく、想像していた通りの姿だった。黒に染まっている。

「よく来たな。勇者よ！」

「久しぶりだな。」

「貴様は死んだのではなかったのか？」

「隣にいる女の子が復活させてくれたのさ。わたしにとってはこの子は恩人なんだ。」

「なんと、復活と!?!素晴らしい能力だな。さて、どのようなご要件だ？」

「それは恩人が会いたって言うからさ。」

魔王は優魅を見た。

「何の要件だ？」

優魅は深呼吸してから、勇気を振り絞って言った。

「魔王を倒しに来た！」

時間が止まったようだった。穏やかな風が囁く。

最初に口を開いたのは魔王だった。

「どうして、倒したいのだ？」

「それが使命だからよ！」と優魅は力強く答えた。

「使命とは？」

「ここに転生された理由！」

「貴様…転生者か？」

「そうよ！それが？」

「まさか、奴の手下なのか…」

『魔王の手』

魔王の影が手の形となり実体化した。そして、優魅を覆う。

影は優魅の体の自由を奪うように握りつぶした。

「勇者よ…すまないが、例え恩人でもそいつは殺させて貰うぞ」「わたしも手下ということは予想外だった。」と勇者。

優魅は苦しそうにもがく。その時には、優魅の手は魔王の影に触れていた。

『第2形態：ドラゴン！』

優魅はドラゴンの姿になった。

影の手は急に大きくなった優魅に耐えきれず、まの元へと戻っていった。

「くらえー！勇者の剣！」

勇者が襲いかかってきた。

『ドラゴン状態：解除』

優魅はドラゴンの姿から人間の姿へと戻ること、勇者の攻撃を避けた。

「どうしてやねん？何で、勇者までもが攻撃するの？」

「恩人だけでも、咲輝さきの手下なら話は別だ」

「咲輝？」と優魅は聞いた。

魔王と勇者の動きが止まった。

「どういうことだ？咲輝の手下じゃないのか？」と勇者は声を荒らげた。

優魅は魔王と勇者を直視した。

「ええ、私はよく分からない”まよう”、さんからの使命だけど…」

「多分、それは真宵という名だ。」と魔王。

「神。まあ真宵という名前の神様はなんという使命で転生させたんだ？」と勇者。

「それは、ここ最近、このゲーム内の死者が多くて、それが殺戮者の原因なの。だから、死者を増やしている殺戮者を倒すのが私の使命よ！！」

勇者は剣をしまい、魔王はリラックスした態度をとった。

「貴様、勘違いしているぞ。殺戮者っていうのは、咲輝という転生者だ。」と魔王。

「聞きたいんだけど、咲輝って？」

「咲輝は優魅と同じく転生者。そして、最初の転生者だよ。」と勇者は語った。

「貴様の能力はなんだ？」

「無限魔力と復活魔法。それと…技真似かな」

「だからドラゴンに…」

「そう言えばっ」と勇者はあたふたした。

「どうしたの？」と優魅は聞いた。

「さつき優魅を敵だと思って、メラぽによんを殺しちゃった…」

「大丈夫。復活させるから」

『2／3回復活ヒーリィケアー』

メラぽによんは復活した。

「なるほど、復活魔法があるならまだ勝てる可能性もあるかもしれないな。」

「やるのか？」

「今しかなかろう」

「1週間後、実行しよう。倒しに!!」

魔王と勇者が話していた。

「魔王はいつも悪役だった。だから、殺戮者と間違えられたのも理由が分かるし、今回は許そう。」と魔王は言う。

「ありがとうございます」と優魅はお礼を言った。

「貴様の殺戮者倒しの手伝いをしたい。仲間に入れてくれないか？」

「魔王がいるのは心強いです。」

魔王が仲間になった▼

「わたしも咲輝に…今度こそは勝たなければ。わたしは、1度殺されているから、今度こそはね。」

「咲輝っていう人に殺されたんだ…」

「そう。わたしも倒しに行くのなら仲間になりたい。」

「ありがとうございます。」

勇者が仲間になった▼

「まずは、アイテムを揃えよう。準備はバッチリにしないとね。」と勇者は優魅に言った。

「分かりました。」

「魔王よ。1週間後、ここで待ち合わせよう。」

「分かった！」

優魅は殺戮者咲輝を倒すための準備をするため、良い装備などが沢
山売っている村へと行くことになった。

第5話 決戦の準備をしている途中に…2人の仲間 !?

勇者は優魅とメラぽによんを連れて、村へとやって来た。

「ここが例の村ねえ」

勇者は村につくやいなやすぐさまひとりで飛び出していった。
戦闘用の品を買いに行ったのである。

残った優魅は村の武器屋とデザート屋を周り始めた。

「やっと戻ってきた、おっい」

勇者の武器買いが終わり戻ってきた。

優魅はアイスクリームを食べながら、大きな声でかけた。

優魅、勇者、メラぽによんの3人でまとまっていた。

その時、事件が起こる。

「おばあさんが死んだぞー！」

1人の青年による声が村に響く。

そして、その声は村中に広がっていき、動揺の波になった。

「あのおばあさんが？」

「この世界はどうなってしまうの？」

「しにがみ咲輝を倒す最後の希望が…」

などの声が聞こえてくる。

優魅はそこら辺にいた村人におばあさんがどういう人なのかを聞いてみた。

” そのおばあさんはこの世界で最強の殺戮者咲輝に対抗できるほどの強さを持った人で、今さつき病気で死んだ。 ” ということを優魅たちは聞いた。

「早速行ってみようよ」と優魅は勇者に続けた。

「わたしはちよつと別行動をとるよ。」と勇者。

「じゃあ、私だけで行ってくるね。」

家の外にたくさんの人がいた。勇者を置いて、優魅はその人達の間を駆け抜けていった。

そして、家の中へと入った。

家の中にもたくさんの人がいる。その殆どが、一つの方向に向かって頭を低くして泣いている。

優魅はそんな人々をかき分けて進み、めっちゃ強い!?おばあさんの元へとやって来た。

『エスケープル』

優魅の復活魔法によつて、おばあさんが復活した。

村人はみな驚き仰天した。

おばあさんは元気があまり過ぎて家の外へと向かった。みな進む道を作るために、一本道を作るように避ける。

おばあさんは外の新鮮な空気を吸い気持ちよさそうにした。

「大丈夫ですか？」と優魅は声をかけた。

「オメエさんはダレだあ?」

「あなたを復活させたものです。一つお願いがありました。」

おばあさん（c.v.：野沢雅子）は特徴的な声だった。

「お願いってなんだ?」

「今から私とモエちゃん（メラぽによん）と勇者と魔王とで咲輝^{しきがみ}つていうのを倒しにいくんですが、一緒に倒しについてくれませんか?」

「そうか、勇者と魔王が手を組んで、咲輝^{しきがみ}をなあ。分かった、ついていってやろう。」

おばあさん（c.v.：野沢雅子）が仲間に加わった▼

優魅とメラぽによん、おばあさんは勇者の元へと向かった。

勇者の隣に誰かがいる。

「倒しに行くために、仲間に加えてもいいか？とても強いよ、こいつは」と勇者。

横にいたのはゼルンだ。

「なにっ？恩人って、優魅のことだったのか？」

「そうだけど」

「何でコイツなの？」と優魅は入っていった。

「こいつは昔ながらの知り合いで、結構強いんだぜ。」

あのコロシウムでの対決の時に、ゼルンがまあ強いことは知っていたので、断るほどのことでもなかった。

「まあいいよ。仲間になっても」

「何で、上から目線なんだ？まあ、いいが。目標は一つ、咲輝を倒すことだからな。」

ゼルンが仲間に加わった▼

こうして、咲輝を倒すための準備が整った。

現在の仲間：優魅、メラぽによん、勇者、魔王、おばあさん、ゼルン

最終話 「『元』王道RPGゲームの中に転生した私は無限魔力で世界を救う羽目になって…!？」

「まずは話し合って、解決出来るか試してみる。殺戮さえやめてもらえばいいことだし、これですんだら被害もないでしょ？」

優魅は仲間たちに言った。

しかし、仲間たちの反応はいまいちだった。

「それは危険だ。」と勇者。

「アイツはそんなことを言うヤツじゃないと思うが」

ゼルの言葉でおばあさんと魔王は頷いた。

「しかし、それでも言うなら行けばいい。しかし、少しでも危ないとこちらが感じたらすぐに戦闘を開始するからな」と魔王が言った。

「分かった」優魅は言う。

「戦闘になったら、前線はこちら側で行い、敵が傷ついた所を魔王の軍、全村人、全モンスターで攻撃する予定だ。覚えておいてくれ。」

優魅はそれを聞くと先に行ってしまった。

扉を開けるとそこには1人の女性がいた。少し露出度が高く、優魅には真似出来ないような服装をしている。優魅を先に待ち構えていたようだ。

「ようこそ、あたしは天西てんせい。咲輝。風の噂で聞いているわ。北 優魅さん。」

「こんにちは。何故、私の名前を？」

「あたしは誰かから奪い取った特殊能力によって、この世界の情報の大半は網羅しているわ。」

「私がここに来た理由も？」

「そうよ。あたしはこの神様。従わない者は殺すし、欲しい能力を持つている者も殺す。残念だけど…」

「交渉失敗ってこと？」

「そうね。まあ、あんたには死んでもらうわ。さようなら。」

扉が1人でに閉まっていく。

扉が完全に閉まると、ガチャンと音がなった。完全に逃げ場を失った。

「あんたには穏やかに眠ってもらおうね。」

『R. I. P. レスト・イン・ピース』

咲輝の腕は黒い霧に包まれている。触れると死んでしまう感じだ。死ぬ！

優魅は目をつぶり、死ぬことを受け入れようとしていた。

咲輝の闇の腕は段々近づいていく。

『魔王の炎』

咲輝の目の前に闇の炎の壁が出来る。

闇の炎と闇の腕は衝突し相殺した。

「大丈夫か？」

そこにはメラぽによん、勇者、魔王、おばあさん（CV：野沢雅子）、ゼルの姿があった。

扉をぶち壊してやって来た。

「そうそう、言い忘れてたわ。あんたたちがあたしを殺しに来ているから、この世界を一人残らず殺害することにしたことをね。」

咲輝は少しキレ気味だった。

「多分、この世界は咲輝によって消滅するだろう。もう終わり…だ。」
勇者の言葉を筆頭にして優魅の仲間たちは焦り始めた。

優魅は仲間を勇気づけることにした。

「まだ分からないよ。咲輝を倒して、この世界の消滅を防ごうよ。」
「そうだなあ、みんなで世界を救おうじゃねえか。」とおばあさんが言う。

「私はこのために復活能力と無限魔力を貰ったんだ。だから…」

「無限魔力でこの世界を救う!!」

「優魅はこの世界を救うために、咲輝を倒すことになった。」

「ぽいよー」

メラぽによんは咲輝に体当たりをした。そして、すぐにやられてしまった。

『エミリア』

メラぽによんは復活した。元々体力は低いので、体力1で復活しても問題ではなかった。

メラぽによんの攻撃を気に、勇者や魔王、ゼルンが攻撃を開始した。全ての能力がMAXの咲輝には歯が立たない感じではあるが、優魅の復活魔法でそこそこの苦痛を感じさせた。

「復活魔法は邪魔ね…全体攻撃で終わらしてあげるわ」

『フレア・インパルス』

周囲に熱い衝撃が迸った。家はもちろん全てが吹き飛んだ。周りには跡形もないようだ。

そして、優魅とその仲間たちは…

生きていた!!

おばあさんは手を前にして、その攻撃を受け止めたのだ。

「危ねえだろ！仲間が死ぬところだった。こっちも本気でいくぞお！」

おばあさんの力が漲っていく。

「はああ!!」

おばあさんの髪が金髪になり、とても強くなったように見えた。

「いやいや、突っ込みどころ多すぎて、どこから突っ込めばいいかわからない」と優魅は心の中で呟いた。

「いくぞ、オメエ」

おばあさんは瞬間移動をし、咲輝の目の前に来た。

おばあさんと咲輝の攻撃は見えなかった。戦う場所が空へと移り、

激闘している。優魅たちには見えていない速度で…

おばあさんが優魅たちの目の前に来た。咲輝は距離を置いた場所にいる。

「強えな！最終兵器げんきだまを繰り出すしかねえなあ！」

おばあさんは空に向かつて両手を掲げた。

「勇者ら。オヌシらは上げるなよ。上げれば戦えなくなるぞ。」とおばあさんは言った。

「何するの？」と優魅。

「この世界のみなから力を集める。」

『みんな聞いてくれ！この世界が咲輝しにがみによって消滅の危機なんだ。手を上げて力を分けてくれないか？世界の危機なんだ！』

この声がこの世界中に響き渡る。

みな咲輝に怒り、恐怖などを感じていた。少しでも役に立って、咲輝を倒せるのならとこの世界の優魅とその仲間と咲輝以外のみんなが手を上げた。

空中に大きな大きなパワーの漲っている玉が浮かんでいる。

「いけえ!!」

おばあさんはその玉を咲輝に当てた。

咲輝の周りだけ、何もかもが消滅した。

「まだまだわね…」

しかし、咲輝は生きていた――

咲輝は消えた。

ふと現れた時には、おばあさんの隣にいた。手をおばあさんの頬につけていた。

『究極衝撃波グレートインパクト』

騒音が響く。とともに、おばあさんは吹き飛ばされていった。

有り得ないほどの砂飛沫が起きる。山を壊し、海の上を過ぎる。そして、優魅たちから見えなくなった。

「復活しに行けない所まで吹き飛ばせば、復活なんて出来ないでしょうね」

優魅たちは固唾を呑んだ。

優魅にとって咲輝の強さは想像以上だった。

「ぽによおん」

メラぽによんが攻撃を仕掛けた。

『サンダルフォン・プリズン』

咲輝の手から不思議な物質が飛び出した。その物質は檻となり、メラぽによんを閉じ込める。

「あれはサンダルフォンの牢屋。あそこから助け出すには、特別な鍵が必要だがその鍵はここから遠い場所のサンダルフォンの部屋にある。」と勇者が解説した。

「ということは、モエちゃんは今は助け出せないってわけね」「そうだね」

「最も残酷な技で殺してあげるわ」と咲輝。

『召喚：ノアの方舟』

空に幾つかの時空の裂け目が現れた。そこから、大量の水が流れ込んでいく。また、1番大きな裂け目からは空船が現れていく。

咲輝は空中を飛び、空船に乗った。

流れ込む水はすぐさまこの世界を浸水させた。これによって、魚類など以外の生物が大量に死んでしまった。

その死にはメラぽによんも含まれる。

『奇術：雷気魔羅』

空船から大きな雷が地面に向かって落ちていった。

この世界を覆う水は黄色に染まった。

「危なかった…」と優魅。

「あの時に、ゼルンの斬撃で水を防ぎ、魔王の変身でドラゴンになって

いなければ、雷の餌食になっていたよ。」と勇者。
そこには、黒龍ドラゴンとなった魔王の上に優魅、勇者、ゼルンが乗っ
ている。

「これで空を飛べる生き物の一部以外と魔王ら以外は死んだな」と魔
王は言った。

「モエちゃんを復活させたいけど、水の中だからすぐに死んじゃうね
…」

「生きてたのね」

咲輝は優魅たちに気づいた。

「じゃあ今度は、殺しはしないけど永遠に死んで貰うわね」と咲輝。

「どういうこと？」優魅は聞き返した？

「今に分かるわ」

咲輝は優魅たちに手を向けた。

「目を瞑って、魔王の翼に隠れる!!」魔王は焦っているように見える。
『ゴルゴンの光』

眩い光に包まれる――

目を開けると…

魔王は石となっていた。

石となった魔王は羽ばたけなくなり墜ちていく。

ドボン

水に入ってしまった。おかげで壊れずにすんだ。しかし、大切な仲間
が戦闘不能になった。復活魔法が効かないのだ。

「あの攻撃は、ゴルゴンの光」。浴びるか直視すると石になってしま
う。石になったものを戻に戻すには、ゴルゴンという魔物を倒さなけ
ればならない。」と勇者。

「そいつを倒せば…」優魅は言う。

「けど、そいつのいる場所もここから遠い…」

優魅たちは魔王の離脱は諦めるしかなかった。

「私も戦うしかないし、戦う!!だから、援護して。まずは咲輝に触らな

ければ」

勇者とゼルンは「分かった」と頷いた。

『スレイプニル』

斬撃が咲輝を襲う。また、優魅とゼルンの同時攻撃で咲輝に逃げ場はなかった。優魅は、ひとまずゼルンに触っていたのだ。

直撃はするものの全くダメージは入っていないようだった。

「勇者の剣」

勇者は空を跳び、斬りかかったが咲輝は後ろ側に飛ぶことで躲した。

勇者は水へと落ちていった。

タツチ！

優魅は咲輝に触れた。咲輝が後ろに避けることで、優魅は触れることが出来た。

「ここから、私も参戦するよ！」

『バニア』

炎が燃え盛る。

『フリズナ』

周りが凍る。

優魅と咲輝のレベルの高い技の撃ち合いは激化していく。勇者とゼルンについてはいけず、魔王の背中で2人の戦闘を眺めている。

そして――

この争いも終わりをつげることとなる――

優魅は咲輝の頭上を取っていた。

「これで終わりよ。あなたの持つ技で1番最強の…。だけど、謎に包まれている技…」

『The・end・war』

優魅の腕とその周辺が眩い光に包まれていく。周囲に煌びやかな灯りが広がっていく。

その後、優魅は消えてしまった…

『瞬間移動』

咲輝は優魅の攻撃をテレポートで間一髪避けていた。つまり、あの攻撃で消えたのは優魅だけだった。

「残りは2人ね…」

『ヨル・ムン・ガルド』

蛇の斬撃で創られた化身が宙を這う。その蛇は咲輝に直撃した。

ゼルンは先手必勝で攻撃した…が、その攻撃は咲輝には効かなかった。

この技は優魅を倒すために開発したゼルンの中で最強の斬撃技だった。

「温いわ…」

『貫通』

鋭い風圧がゼルンを襲う。ゼルンはその攻撃で、風穴をあけられた。

そして、ゼルンは魔王から転げ落ちて水の中へと落ちていった。

「残るは1人…。何かの縁があるのかもな。勇者の使命みたいなね」と勇者は言った。

勇者は魔王の頭に立って、剣を咲輝に向けていた。

中年の男といい歳した女が睨めあっている。

先に動いたのは咲輝だった。咲輝は勇者目掛けて降りていく。

『秘剣：約束された勝利の剣』

勇者も負けず劣らず動く。魔王を踏み台にして、空を跳んだ。

『勇者の勝利すべき黄金の剣』

2つの剣が今にもぶつかろうとしていた――

エピソード

「いってってって…」

この感触に見覚えがある…

あの時と同じように――

ブォーーン

車がやって来る。その車はこのまま行けば私にぶつかる。

ガシャアーン

車が私に衝突した。そして、私は意識を失った。

起きるとそこは病院だった。

体中が痛かった。目を開けるとそこは白い天井に、素っ気のない

カーテンやベッド。

死なずにすんだことを喜ぶことよりも、悲しみの方が優まきっていた。

優魅は目を開けた。

また同じようになるのではないかと思っていたのだが、その予想は裏切られた。

あの時と同じで、喜びなんかよりも悲しみの方が優っていた。

目の前には…

土砂が堆積していて、濡れている地面。そこに横たわる死んでいる人、動物、モンスター。その屍を喰うカラスたち。

まさに地獄のようだった。

生きているものは鳥などの飛べるものの一部だけ。それ以外は死んでいる。

多分、ゲームの世界だろう。土地が変形しているが、何となくその世界の雰囲気がある。

1人残された優魅はその場に立ち込んでいた。

そこに残されたものは、なにも：なかつた。

1人残された女神は虚ろげに空を眺めていた。
FIN

特別編

【無限女神の詩】

「1人残された僕は何を思えばいい?」

悲劇なんて 予想の出来ないものだった。

突如襲う 奇想天外の災害

みんな死んだ だけれど僕だけ残された

孤独な僕は 悲しみに暮れる：

誰も救ってはくれない

ただ独り身の僕を哀れむだけだ：

いつ起きるのか分からない 悲劇の渦に巻き込まれ

取り残された1人の女神 神を救うものなどいない

生き残れたことが喜ばれ 悲劇として救うものはいなかつた

喜劇なんて 予想出来るものじゃない

喜劇は運 それによって左右されてしまう

努力の成果? Do the bestのおかげ?

皆喜び 傷を見せるのはタブーになる

僕の苦痛は 土の中に埋まり消えてく

喜劇に消えた苦しみは

誰も気付こうとしないし排除されてく：

いつ起きるのか分からない 喜劇の渦に巻き込まれ

苦しみ を隠す1人の女神 苦しみ を受け入れる喜劇などない

楽しいことだけが喜ばれ 喜劇として受け入れる苦しみはなかつた

運命さだめを全うする僕は 神の悪戯で悲劇を授うけかる

周囲は奇跡ひかりが宿り喜劇となる 悲劇くらやみの僕は見捨てられた

悲劇も喜劇も裏表 rever seされたら変わりゆく

any one 誰しも裏表 誰しも悪で誰しもヒーロー

いつ起きるのか分からない 悲劇の渦に巻き込まれ

取り残された1人の女神 神を救うものなどいない

いつ起きるのか分からない 喜劇の渦に巻き込まれ

苦きしみを隠す1人の女神 苦きしみを受うけ入いれる喜劇などない

いつ起きるか分からない 不幸と幸運に巻き込まれ…

不幸も地獄、幸運も地獄

女神は奇跡を信じなくなつた

僕だけ残つた災害で、向かい入れるは楽しさだけ

誰も悲しみを直視せず、ただ自身の利益のためと裏がある

僕は1人で生きていく 本当の幸せを掴むために…

「悲劇に負けない！喜劇は信じない！」

「残されし僕は1人で生きていくことを決めた」